

『夷堅志』「契丹誦詩」に見える「俗語」

中村雅之

1. 「俗語」は契丹語にあらず

南宋の洪邁が金朝に使者として赴いた際、そこに風変わりな「俗語」が行われていることを聞き、後にその内容を『夷堅志』丙志十八に「契丹誦詩」という題で記している<sup>1</sup>。その「俗語」について、歴史・言語・文学の研究者たちは長い間、契丹語を指すものと誤解していた。中村雅之 2001 は、その通説に異議を唱え、「俗語」が当時の北方漢語口語(いわゆる漢兒言語)であることを指摘した。本稿では、「俗語」がなぜ契丹語と誤解されたかについて、若干の説明を加えたい。

まず、以前の通説(俗語=契丹語)の代表として、金文京 1988 の説を引いておく。

朝鮮半島の北、中国の東北地方(旧満州)からモンゴルにかけては、日本語朝鮮語と系統を同じくするアルタイ諸語(満州語、モンゴル語等)を話す民族が居住する。……(中略)……そしてこれらの民族の間にもやはり訓読がおこなわれていたことが、次にあげる南宋の洪邁(1123-1201)の『夷堅志』の一節にみえる。

契丹の小兒、初めて書を読むに、先ず俗語を以て其の句を顛倒してこれを習い、一字に兩三字を用いる者有るに至る。頃(さきごろ)使いを金国に奉ぜし時、接伴副使の秘書少監たる王補なるもの毎(つね)に予が為に言いて以て笑いと為す。「鳥宿池中樹、僧敲月下門」の兩句の如き其の読む時には曰く、「月明裏和尚門子打、水底裏樹上老鴉坐」と。大率(おおむね)此の如し。補は錦州の人。亦(ま)た一契丹なり。

洪邁は、南宋の紹興三十二年(1162)に、当時中国北半を征服支配していた女真族の金朝へ使者として赴いたが、その時、金側の接待役の王補という契丹人から、契丹の子供が初めて漢文を習うには、まず「俗語」の語法によって原文をひっくり返して読む、その場合、漢字の一字が「俗語」では二字三字にもなるという話を聞いた。ここでいう「俗語」とは、先に引いた『三国史記』で、薛聡が「方言を以て九経を読んだ」という「方言」が朝鮮語を指した如く、中国語に対する契丹語を意味するのであって、要するに、中世ヨーロッパ人が、ラテン語に対する自国語を *Vulgar tongue* などとよんだのと同じ心持ちである。……(中略)……なお、「月明裏」云々は当時の中国語の口語であるが、おそらく契丹語を解さない洪邁の為に、王補が契丹語を中国語の口語に訳してみせたのであろう。契丹語は蒙古語の一種で、その語序は基本的には日本語に等しく、だからこそ文句を顛倒させる必要があっ

<sup>1</sup> 原文は以下の通り。

契丹小兒初讀書、先以俗語顛倒其文句而習之、至有一字用兩三字者。頃奉使金国時、接伴副使・秘書少監王補、每為予言以為笑。如「鳥宿池中樹、僧敲月下門」兩句、其誦時則曰「月明裏和尚門子打、水底裏樹上老鴉坐」。大率如此。補錦州人、亦一契丹也。(百部叢書集成・十萬卷樓叢書による。句読点は引用者。)

たのである。ここでの「俗語」がもし中国語の口語をいうのなら、顛倒の必要はないと思える。

以上のように、金氏は「月明裏」等の語彙が当時の口語であることを認めながら、「月明裏和尚門子打、水底裏樹上老鴉坐」を契丹語の直訳と見なし、もし「俗語」が中国語の口語なら、「顛倒の必要はない」と考えた。しかし、目的語が動詞の前にくるSOV語順が元代の口語文献(『老乞大』など)に頻繁に見られるのは周知のことであり、金代に同様の口語が存在したと考えることに支障はない。

「俗語」=「契丹語」説が成り立たないことについての詳しい議論は中村 2001 に譲るが、次の一点だけを強調しておきたい。当時、漢詩を習うような漢化した契丹人は当然、北方漢語口語(=漢兒言語)を話したはずであり、漢詩の解釈にわざわざ契丹語を用いる必要はなかった。「鳥宿池中樹、僧敲月下門」という原文を漢語口語で「月明裏和尚門子打、水底裏樹上老鴉坐」と解釈したのである<sup>2</sup>。

## 2. なぜ契丹語と誤解されたか

『夷堅志』「契丹誦詩」の文を「契丹語」と結びつけたのは、管見の限り、田村実造 1938 が最も早いようである。これは平凡社の『東洋歴史大辞典』において「遼」という項目の解説として書かれたものであるが、辞典という性格上、その影響は小さくなかった。田村氏は、1930 年前後から契丹文字資料の調査に積極的に加わっており、契丹語にも人並みならぬ関心を抱いていた。そのような目で「契丹誦詩」の文を読めば、契丹人の「俗語」を契丹語と理解してしまうのも無理からぬことであったかも知れない。

『夷堅志』の輯本として、1927 年に涵芬楼から張元濟『新校輯補夷堅志』が出版されており、田村氏は直接にはこれを利用したのかも知れない。そうであるならば、契丹研究に情熱を持つ若き田村氏にとってタイムリーな出版だったと言えよう。

一方、田村 1938 以降にも、まだ日比野丈夫 1942 のように、「契丹誦詩」の「俗語」を正しく漢語口語ととらえた者もあった。日比野氏は、「すると、当時の契丹人は、大抵一應は支那の俗語に通じてゐた。それで漢文を読むにも我が國と同じやうな返り読みをしながら、契丹語を使はないで支部の俗語を使つたわけだ。これは日本と全く異なる點である。」と記している。当時漢化しつつあった契丹人の言語状態を的確にとらえた記述であろう。

日比野氏のような見方があったにもかかわらず、1950年代以降は「俗語」=「契丹語」という解釈が通説になってゆく。それには、1950年代の契丹語研究の高まりが影響していると考えられる。まず、村山七郎1951による契丹語の解説案、長田夏樹1951の反論、そして田村氏らによる『慶陵』という巨冊の刊行(1953)など、急速に契丹語が注目され始める。その後も長田夏樹1984や清格爾泰等1985など、研究の進展があった。それらの研究者たちには、田村1938に

---

<sup>2</sup> 洪邁が述べた「俗語」の特徴は、①語順がひっくり返ること(顛倒其文句而習之)、②もとの一字が二字や三字になること(至有一字用兩三字者)であった。①は「門子打(門をたたく)」のように目的語が動詞の前にくること、②は「僧→和尚」「門→門子」などを言うのであろう。

おける「俗語」＝「契丹語」説がごく自然に刷り込まれていたと思われる。

### 3. 漢語史研究の立場から

『夷堅志』『契丹誦詩』の文は、契丹語研究の立場から誤って解釈されたわけであるが、本来は漢語史研究の一級資料と言うべきものである。つまり、①後置詞(助詞)の使用と、②目的語の前置を許容するという、漢児言語(＝北方漢語口語)の語法特徴を示す最も早期の資料が「契丹誦詩」なのである。

契丹人は民族的な由来としては非漢族であるが、文化的には北方漢文化の主要な担い手であった。そのような契丹人の俗語が漢語であることは何ら不自然ではない。狭義の漢人や女真人なども含めた北方漢文化の担い手たちによって、「～裏」「～上」などの後置詞を多用したり、目的語を動詞の前に置くことを許容するような口語が生まれ、元代の『老乞大』に代表される漢児言語(＝北方漢語口語)に発達するわけである。

#### <参考文献(年代順)>

田村実造 1938, 「遼[言語・文字]」『東洋歴史大辞典』第8巻, 東京:平凡社.

日比野丈夫 1942, 「契丹誦詩」『東洋史研究』7-2/3.

村山七郎 1951, 「契丹字解読の方法」『言語研究』第17/18.

長田夏樹 1951, 「契丹文字解読の可能性—村山七郎氏論文を読みみて」『神戸外大論叢』2-4.

田村実造・小林行雄 1953, 『慶陵—東モンゴリアにおける遼代帝王陵とその壁画に関する考古学的調査報告』, 東京:座右宝刊行会.

長田夏樹 1984, 「契丹語解読方法論序説」『内陸アジア言語の研究』1, 神戸市外国語大学.

清格爾泰等 1985, 『契丹小字研究』, 北京:中国社会科学出版社.

金文京 1988, 「漢字文化圏の訓読現象」『和漢比較文学研究の諸問題』, 東京:汲古書院.

中村雅之 2001, 「契丹人の漢語—漢児言語からの視点」『富山大学人文学部紀要』34.